

## 横須賀市内産のニホンムカシジカ角化石

長谷川 善和\*・蟹江 康光\*\*

A Fossil Antler of *Cervus praenipponicus* from  
Yokosuka City, Miura Peninsula

Yoshikazu HASEGAWA\* and Yasumitsu KANIE\*\*  
(With 2 text-figures and 1 plate)

A left antler of extinct Japanese Pleistocene deer, *Cervus praenipponicus* from the Otsu member at Shioiri, Yokosuka City, is the first record of that species for Miura Peninsula.

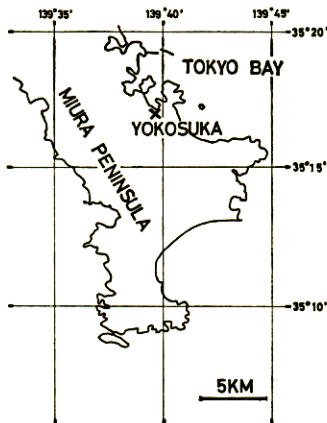
Basal part of the antler is preserved. Main beam moderately curved posterior, and the beam below the first forking rather high and straight. A brow-tine was probably short. The shape of antler is closely similar to that paratype of *Cervus nippon*.

横須賀製鉄所創設時に横須賀市内から最初の化石が2点報告された。古脊椎動物の資料に乏しい横須賀市内産化石としては重要なものであるが、学問的にも歴史的な意味がある。横須賀海軍船廠史第一巻(1915, p. 178, 写真2葉)にこれらの化石が記録された。1点は後日 E. ナウマンが記載した、いわゆる日本最初のナウマン象化石である (NAUMANN, 1881)。このことに関するいきさつは別に述べてある(長谷川, 1968)のでここでは省く。このナウマン象は下顎骨で写真には象齧と説明されている。これは1867年11月7日に発見された。翌年1868年3月29日に2つ目の化石が発見され“象骨化石”として記録された。この年は明治元年にあたる。そして明治4年5月に2点の化石は大学南校の要求に応じて送付された。現在、ナウマン象の標本は、一部国立科学博物館に保管されているが、臼歯がほとんど紛失している。後者の象骨化石の現物の所在については不明であるが、写真でみる限り上下の顎骨が咬合している鹿類の頭骨であることに間違いはない。左斜前方より撮影した写真で縮尺がないため大きさは判明しないが、袋角が発達する直前の雄の頭骨と思われる。これらの産出層は今日、大津層と呼ばれる谷に堆積した海成層である。

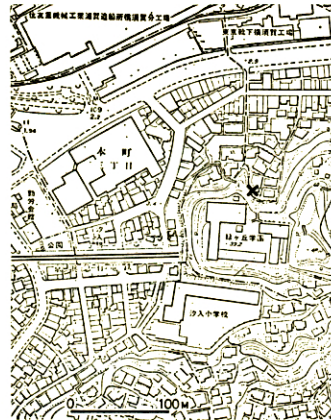
ところで今日、横須賀製鉄所(在日米海軍基地)の南方、汐入駅の東北東200m、緑が丘学院の北側の崖でニホンムカシジカの角化石が発見されたので報告するが、この化石包含層は大津層であることが明らかであり、当角化石の産出から考えて先述した鹿類の頭骨

\* 国立科学博物館 National Science Museum, Tokyo 160, Japan

\*\* 横須賀市博物館 Yokosuka City Museum, Yokosuka 238, Japan  
原稿受理 1976年8月15日、横須賀市博物館業績第259号



第 1 図



第 2 図

第 1・2 図 大津層産鹿角化石の産地 (×) 位置図

はニホンムカシジカである可能性が大きい。以上の点を指摘し、ここに角化石に関して記録をとどめる。

産地および地質：角化石は京浜急行線の汐入駅の東北東 200 m, 緑が丘学院の北側の崖から採集された。海拔約 17 m, その位置は第 1・2 図に示した。しかし、崖は現在石垣がつままれており地層の観察はできない。化石含有層は大津砂泥層（蟹江ほか, 1977）にあたる。その産地は泥岩よりなり、散在的にマガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG) の堆や炭化した木片を含んでおり、当鹿角化石はこのようなものと共に産出した。

標本の記載：当角化石は 1974 年 3 月に緑が丘学院の秋本龍美教諭によって発見され、横須賀市博物館（標本番号 YCM. GP 547）に寄贈された。

角の太さは現生ニホンジカ *Cervus nippon* TEMMINCK のかなり成長した個体の角と大差ない。残っているわずか座骨にみられる縫合面の位置および座骨の形から左側の角である。角幹も第 1 分枝も第 1 分枝より数 cm 上方で破損する。破損部断面において海绵体部は完全に発達せず中心部に空洞がみられる。角の表面にみられる彫刻は基本的には角の主軸方向に走る条線と、その表面に発達する隆起によって特長づけられる。角の前面と内面においてやや多いが、決してそれらは特に強くもないし、高くもない。全体的な感じは、堆積前の移動による磨滅でなく、堆積後地層中における溶蝕と思えるような“磨滅”がみられる。このために、表面彫刻の形が不鮮明である。

角座と角幹の境界は明瞭である。

角幹は、わずか外方に反るが、ほとんど直線的に伸びる。正中線と主軸との角度は約 30° ほどの開きで、後方への傾斜角は 20° 前後である。すなわち、側方にも後方へもそれほど開かず、しかも直線的に発達している。

角幹と第 1 分枝との角度は小さく約 60°, しかも分岐点は高く 8.3 cm を越える。分岐部における三角地帯は広く、その上端部での高さは 10 cm を越える。第 1 分枝は角幹の主軸と同方向前方に伸びる。ニホンジカでは外側下方に曲るが、この個体はむしろ内上方に反る。角幹はほぼ直線的とはいえ主軸が第 1 分岐点後方辺からゆるやかに後方に曲る。

## 測定値 (mm):

座骨も含めての全長	198
角座後部下端より主軸先端まで	147
角座前部下端より第1分枝先端まで	112
角座内側中央下端より第1分枝の先端まで	103
角座最大前後径	42
角座最大内外径	42
角座最大厚	8
角座直上の角幹最小内外径	29
角座直上の角幹最小前後径	25
角幹の第1分枝上方の最大内外径	22
角幹の第1分枝上方の最大前後径	22+

鹿間 (1936) の葛生産ニホンカシジカ *Cervus praenipponicus* SHIKAMA の完模式標本 (東北大 Reg. No. IGPS 58804) に比較すると、全体に当標本の方が直線的でしかも、第1分枝の高さはこの方が模式標本より高い。むしろ、同時に報告された、神奈川県横浜市の上粕尾国道南側崖から発見の副模式標本 (Reg. No. IGPS 58805) の特徴によく似る。また、長谷川 (1969) が紹介した横浜市鶴見区の宝泉寺門前の崖の下末吉層から発見された角も直線的である。大津層と下末吉が同層準に対比できるかどうかは意見があるであろうが、ナウマン象の産出すること、類似のニホンムカシジカの角を産することなど両層の同時性を考えることができる。また、完模式標本との相違と神奈川県産3点の類似性はニホンムカシジカの地域性を示すものであろうか。カズサジカ *Cervus kazuensis* MATSUMOTO との関係も検討する必要があるが、ニホンムカシジカの地域的・時代的变化とともに将来合せて詳細に検討することとし、ここではその概要を述べることにとどめる。当標本はその特徴から *Cervus praenipponicus* SHIKAMA と同定しておく。

本稿を終るにあたり、本標本を検討する機会を与えられた緑が丘学院教諭秋本龍美氏に厚くお礼申し上げる。

## 文 献

- 長谷川善和 1968. 三浦半島の象化石. 横須賀市博雑報, (13):12-13.  
 ——— 1969. 下末吉層産鹿角と象歯化石. 神奈川県立博物館だより, 1 (8): 5-6.  
 蟹江康光・新井重三・長沼幸男・大越 章・長田敏明・高橋輝雄 1977. 三浦半島東部, 横須賀付近の第四系. 地質雑, 83 (3): (印刷中).  
 NAUMANN, E., 1881. Ueber japanischen Elefanten der Vorzeit. *Palaeontographica*, 28 (1): 1-40, pls. 7.  
 鹿間時夫 1936. 本邦化石鹿の一新種ニホンムカシジカ (*Cervus* cfr. *Anoglochis*) *praenipponicus* sp. nov.) に就いて. 地質雑, 43 (510): 168-176, 図版 9.  
 ———・長谷川善和・蟹江康光 1972. 横須賀市大津層産巨角距骨化石. 横須賀市博研報, [自然], (19): 36-39, 図版 7.  
 横須賀海軍工廠 1915. 横須賀海軍船廠史. 1: 274 p., 24 図版.

図版 6 横須賀市本町3丁目, 緑が丘学院北側の崖より発見された, いわゆるニホンムカシジカ *Cervus praenipponicus* SHIKAMA の左角化石. 1: 後面観, 2: 内面観, 3: 前面観, 4: 側面観

